

未来を育む

一 子育て支援対策としてのプレイバックシアター

劇団プレイバックーズ 宗像佳代

現代日本の子育て事情は難しい局面をむかえている。ここでは、劇団プレイバックーズが、子育て支援対策として、プレイバックシアターを上演した経緯を紹介する。そして、その延長線上で私たちが育成した2つのカンパニーを紹介する。

第一章 ことのおこり

2002年、ある地方都市で、劇団プレイバックーズは、子育て支援をテーマとする公演をした。今日の日本では子育てにまつわる痛ましい事件が増えている。地方自治体や民間団体が、それぞれの対策を模索するなか、プレイバックシアターにも白羽の矢がたった。

平日の午前中、市民講座の会場には若い母親が30人ほど座っていた。隣の部屋は保育室にあてられ、彼らの多くは、幼い子どもを預けての参加であった。いわゆる専業主婦が切々とストーリーを語った。

初めて子どもを保育に預けて、この席に座っている。これまでも講座に参加したいと思ったが、そのたびに親や夫に反対された。「自分の楽しみのために、小さい子どもを他人に預けるなんて母親としての自覚が足りない。3歳までは、家庭にいて育児に専念すべき。自分のことは我慢して子どもを大事にしないと今に不良になる」と言われてきた。今、ここにも、隣の部屋で1歳の娘が泣いているのではないかと気がかりだ。子どもを泣かせてまで自分のしたいことをしていいのだろうか。子どもと二人だけで毎日息がつまりそうだったので講座に参加したものの、やはり自分は母親失格かもしれないと思う。

かつて日本では地域共同体が子どもを育てていた。迷惑をかけてもお互い様という価値観があり、困ったときには支え合う関係性があり、市民は一体感のなかで生活していた。両親だけでなく、祖父母、叔父叔母、親類縁者、隣近所の人々が子どもたちを育てた。そして、普通に生活していれば、子育ての知識やスキルは自然と学べるものだった。

それにひきかえ、現代の母親は一人で子どもを育てるようになった。乳幼児がどのように育っていくかという伝承もないまま、文字通り、孤軍奮闘である。おそろおそろ新生児を抱き上げる。母乳が出る出ないに一喜一憂する。泣きやまない我が子を抱き、なすすべもない。すべてが初めて、未知の体験である。朝から晩まで、子どもだけの時間で心身ともに疲労が募る。夫は夜の9時になっても帰ってこない。これが今の日本の典型的な子育ての風景である。

かつての共同体にあった助け合い精神や情報交流は失われてしまったのに、伝統的な母親神話はいまだに人々を支配している。母親と乳幼児のつながりを極端に大切に
する日本特有の価値観である。「自らを犠牲にしてでも、子どものために尽くす母親」
という看板が若い母親を押しつぶす。期待されるような母親になろうと努力するが挫
折する。そして、息苦しくなった母親が精神を病むことになり、子どもを虐待するこ
とになる。

プレイバックの公演で、このような母親のストーリーが語られる。観客はテラー
の話が我がことのように聞き、演じられたストーリーを見て涙する。共感の涙であり、
自分だけではなかったのだという安堵の涙であり、こんな私でも受け入れられたのだ
と愛を感じての涙である。テラーも、観客も、心を一つにし、見知らぬ人とつながり、
温かい気持ちを携えて帰っていく。アンケートは、たくさんの感動の言葉が綴られ、
明日への希望に満ちあふれている。

公演のたびに私たちは、社会に貢献した手ごたえを感じた。けれども、プレイバッ
クシアターが今の子育て事情を変えられるのか、という疑問がついてまわった。親が
子どもを放置し、虐待、殺しさえもする。後をたたない悲惨なニュースに触れるにつれ、
疑問は大きくなった。日本各地を点で訪れるプレイバックシアターの上演だけでは間
に合わないのか。公演で生まれたつながりも一体感も、時と共に殺伐とした現実に埋
もれてしまうのか。

ちょうどその頃、スクール・オブ・プレイバックシアター日本校でジョナサンが「ソー
シャルチェンジ」を指導した。そして、私たちの疑問をとく鍵がそこにあった。彼が
教えたキーワードは「継続的に演じること」と「当事者が演じること」である。「継続性」
とは、単発公演でなく、同じ場で続けて公演が打てることだと思った。「当事者」とは、
現役の母親がアクターとして舞台にあがることだと思った。この2つのキーワードが
その後の私たちを導くことになる。

第二章 子育て支援カンパニーの誕生と成長

その頃までに私たちは、2つの母親グループと出会っていた。初めは、上越市で活
動する NPO法人マミーズ・ネットであり、次いで横浜の子育て支援ネットワーク「サ
ンコファ」である。劇団プレイバックは、ある意味、この2つのプレイバックカ
ンパニーの産みの親、育ての親である。しかし、プレイバックシアターによるソーシャ
ルチェンジ、子育て事情の体質改善という領域では、いまや双方ともがプレイバック
を凌ぐ存在となっている。彼らは、母親としての当事者であり、継続してプレイバッ
クシアターを演じる場をもっているのである。

私たちが出会ったとき、マミーズ・ネットは、既にいろいろな子育て支援プログラ
ムを地域に提供していた。彼女たちは、プレイバックシアターに出会うや否や、子育
て支援をテーマとする公演を私たちに発注した。続いて、自分たちのためにプレイバッ
クトレーニングの機会をつくった。中核となるメンバーがスクールに通い、ステージ

に立つようになった。以前から子育て事情を訴えるシナリオ劇を演じていただけに、その成長は早かった。プレイバック人としては初心者だったが、彼女たちが口にする即興のセリフは際立っていた。日々、子どもと向き合っているからこそ、母親として生活しているからこそそのセリフが飛び交った。そこには劇団プレイバックーズのアクターが逆立ちしてもたどりつけないリアリティがあった。

彼らは組織の運営ができ、実績もあったので、プレイバックシアターを継続することに困難はなかった。グループでは、メンバーのそれぞれが得意分野をもって貢献していた。私にとっては斬新な組織運営だった。「組織の目標を共通にし、公平感をもって業務を分担し、平等に責任をおい、決めたことは成し遂げる」というビジネス界の価値観はなかった。彼らの合い言葉は「同じミッションをもつもの同士が複数で責任を分担し、決めたことは成し遂げる」であった。子育て中の母親達である。出がけに子どもがぐずることもある、思いがけない怪我や病気にもであう、予定通りにものごとは進まないものだ、という共通理解があった。遅刻も、直前キャンセルも受け入れる寛容さがあった。

子育て中の母親だけで組織を運営するコツを彼女たちから教わった。

そして、横浜にサンコファが誕生する。ワークショップでプレイバックシアターの手ほどきをし、合同パフォーマンスを打って彼女たちを育てていった。マミーズ・ネットと違い、一からのスタートだった。「ちょっとやってみるのは簡単、継続することは困難」と言われるプレイバックシアターである。当然のことながらカンパニーとしてデビューするまでの道のりは平坦ではなかった。彼女たちが、なぜ継続できたのか、途中で投げ出さなかったのか、その成功要因を探ってみる。

・子ども心ー なにはともあれ、楽しかった。

彼女たちは心の底からプレイバックシアターを楽しんだ。ウォームアップ、実習の一つひとつに夢中になり、目を輝かせ、身体全体で飛び跳ね、大声で笑った。それまで眠っていた子ども心が目覚め、遊び心を取り戻した。

・自己実現ー 自分が生きている実感が得られた。

彼女たちは「普通のお母さん」だった。自分を犠牲にしても、望みを我慢しても、感謝の言葉をかける人もなく、賞賛の拍手も、尊敬のまなざしもなかった。そんな彼女たちが舞台に立つようになった。アクターとしては初心者で演技に自信があったわけではない。しかし、一本のストーリーを演じ終えて振り返ると、テラーが感動して涙している。こうして彼女たちは、「母親」を超えて「一人の成人」であることを自覚するようになった。水を得た魚のように自己実現をしていったのである。

・つながりー わかりあえる仲間に出会えた。

プレイバックシアターがどんなに自分たちを幸せにするか実感した。そして、同じ喜びを他の母親にも味わってほしいと思った。母親たちの口コミの威力は素晴らしい。いつも会場にはたくさんの観客が集まった。子育て支援のネットワークが広がっていった。

・社会的存在ー社会に貢献できると思った。

やがて、グループ内で自分たちのストーリーを演じ合っているだけの存在ではなくなった。プレイバックシアターによって、救われる母親たちがまだまだ埋もれていると思った。公演依頼が舞い込み、助産院のホールでは定例プレイバックシアターが催された。気がつくと社会につながり、地域に貢献する存在となっていた。「**専門母親**」からの脱皮である。

・組織運営の壁ーメンバーが互いを支えた。

締め切りのある雑事が増えていった。公演先の開拓、助成金の申請、条件交渉、契約、打合せ、チラシ作成、会場準備、保育の手配などである。つい昨日まで専業主婦だった彼らには荷が重いかと心配された。そこで、プレイバックは、蓄えてきたナレッジを、組織運営知識を、マネジメントスキルを、ビジネススキルを手渡していった。私にとっては子どもを産み、育て、独立させていく道のりと全く同じであった。苦労はしても、喜びが伴う関わりだった。

・誰がいて誰がいないかー責任を負い、倫理を守ることの難しさに直面した。

児童虐待の公演依頼がきたとき、入ったばかりのメンバー、ほとんど稽古に参加できないメンバー、心身の調子が悪いメンバーがいた。私たちは、過去の失敗体験を伝え、「誰が舞台にあがるのか」という問いを投げかけた。「誰にでもできる」、「誰をも受け入れる」それがプレイバックシアターだという声があがった。「誰でもが虐待シーンを演じられるのか」という疑問もでた。考え方の違いが浮き彫りになり、グループにひびが入った。メンターである私たちに最終判断がゆだねられ、メンバーそれぞれが自分の力量に応じて参加することになった。成長の証しとしての葛藤だった。

・ビジョンー先にあるものが見えた。

軌道に乗ると、カンパニー活動のために使う時間が増えた。それは根幹的な問題につながった。家事がおろそかになるのではないか。自分の子どもを人に預けてまで活動するのか。夫の理解や協力が得られるのか。家族に迷惑をかけるのではないか。そして、究極の問いにぶつかる。よりよい子育て環境をと願っていたはずなのに、これでは本末転倒ではないか。自分の家族をおいてまで、自分の子育て時間を犠牲にしてまで、なぜ、プレイバックシアターをやるのか。悩み、考え、ストーリーを語った。ほどなく、ビジョンを問われるようになった。得られた答えは、グループを続けていくことだった。「**継続**」と「**当事者**」の2つのキーワードをしっかりと実現するカンパニーへの脱皮である。気がつくと、親のプレイバックができないことを子どものサンコファが成し遂げていた。

第三章 次世代と共に

子育て支援カンパニーを育てる経験を得て、プレイバックーズは自らの新しい役割を見つけた。これまでメンバーの多様性にこだわり、どんなテーマでも引き受け、よりよい地域社会をつくるための公演をしてきた。ジョナサンが提案しているソーシャルチェンジのキーワード、「当事者が演じること」、「継続して演じること」を意識したとたん、未来への道が複線になった。

パフォーマンスを受注して演じる従来のスタイルと並行して、プレイバックシアターを演じる当事者グループを育成する道が現れた。第一世代のプレイバックーズが過去のナレッジであるプレイバックシアタースキルとカンパニー運営知識を次の世代に伝承していく。私たちがカンパニーを育てていけばいくほど、プレイバックシアターがより速く、広く、深く、社会を変えることになる。

これは伝統的な日本社会が子どもへ、孫へと人生の知恵を伝承したスタイルを習うものである。どう生きるか、どのようにふるまい、どんな気持ちで日々を送るか。後世にその知恵を伝え、孫子の成長を見守り、困ったときには手を差し伸べ、負うた子に教えられる社会を創る試みである。それぞれの世代がその役割をにない、相互に支え合い、全体として幸せに生きていける未来を創る試みである。